

中部地域には風光明媚な自然、歴史的な大事件の舞台となった場所等が多く存在し、映画やドラマのロケ地として使用された場所が多くありますが、それらを地域の活性化に結びつけたり、観光の資源として活用する動きが必ずしも十分でないと言われています。調査季報「中部圏研究」では、こうした中部圏におけるロケ地誘致により地域が情報発信を行い、その後の地域の活性化につなげている事例を取材し紹介していきます。

【事例1】

浜松・浜名湖地域振興映画製作プロジェクト（静岡県浜松市）

「やらまいか精神」が生んだ

浜松発、地域を元気にする映画プロジェクト

財団法人中部産業・地域活性化センター

客員研究員 坂口香代子

2005年、静岡県浜松市を舞台に、地元主導のある1本の映画製作が始まった。日本3大砂丘のひとつといわれる中田島砂丘で毎年5月に開催される凧揚げ合戦をモチーフに、凧に込められたそれぞれの思いが物語を彩る2006年公開の『天まであがれ!!』だ。さらに2009年には、浜松発映画第2弾となる『青い青い空』の制作が「浜松・浜名湖地域振興映画製作プロジェクト」として発表される。この2本の映画は、通称「浜名湖えんため」と呼ばれる環浜名湖地域の観光振興を考える会が主体となり、明確な目標を持って作り上げられたものである。中部のコンテンツツーリズム事業の今を、まずこの浜松の事例から紹介したい。



(浜名湖えんため 提供)



(浜名湖えんため 提供)

1. 「浜名湖えんため」の設立

浜名湖かんざんじ温泉観光協会の 若手有志が抱いた危機感

そもそもの始まりは、「浜名湖かんざんじ温泉観光協会」に属するホテル・旅館など協会の後継者問題だった。

浜名湖北東に位置するかんざんじ温泉は、開湯こそ1958年（昭和33年）と新しいが、海水浴、釣り、観月の名所として知られ、リゾート型遊園地「浜名湖パルパル」などレジャー施設の整備との相乗効果で、浜名湖観光の最大宿泊地として団体客を中心に飛躍的に発展を遂げてきた。そのような中、1989年（平成元年）には日本の名湯35位に選出されている。（資料1）

しかし、1990年代以降、日本全体の景気後退とともに、日本人の旅行形態が団体から個人へとシフトする旅行者ニーズの変化の中で、日本の多くの団体客向けに栄えた温泉地の例にもれず、徐々に衰退傾向が表れ始めていた。

「それが最も顕著に表れたのが、後継者がいないということです。2000年当時、これはもう危機的状况でした。温泉地としても、旅館としても。」

「浜松・浜名湖地域振興映画製作プロジェクト」において中核として活動する「環浜名湖地域の観光振興を考える会（通称『浜名湖えんため』）」代表の稲葉大輔さんも、実はその渦中の後継者の一人だったのだ。

稲葉さんは、現在、浜名湖かんざんじ温泉にある「ホテル鞠水亭」の若旦那として家業に励んでいるが、大学卒業後は東京で就職し、1999年、25歳の時に帰郷するまで、家業を継ぐことに決して前向きではなかったという。

「父が早くに他界したので、社長としてホテルを切り盛りしてくれていたのは母だったのですが、その母からも『継がなくていい』と言われていたのです。母に限らず、当時のかんざんじ温泉には、

後継者自身が継ぎたくないという思いを持つとともに、将来の見通しの立たない家業を子どもに継がせるのをためらう経営者も多く、かんざんじ温泉存続の危機がもう目の前まで迫っていたわけです。」

【資料1】

【浜名湖かんざんじ温泉】



（浜名湖えんため 提供）

静岡県南西部に位置する浜名湖の北東岸に1958年（昭和33年）に開かれた温泉地。漢字表記は「館山寺」。弘法大使が810年に開いたと伝えられ、温泉名の由来ともなった古刹・館山寺が建つ館山（たてやま）と、山頂からの眺望が素晴らしい大草山に抱かれるように温泉地が広がっている。周辺は、古くから浜名湖屈指の景勝地とも知られ、「遠州の奥座敷」として北原白秋はじめ多くの歌人にも愛されてきた歴史も持つ。現在は、浜名湖畔の美しい景観を湖上から楽しめる遊覧船の発着地であり、かんざんじロープウェーや遊園地の浜名湖パルパル、浜松市動物園、はままつフラワーパークなどのレジャー施設も充実している。

さらに近年は、日帰り温泉や周辺の観光地ツアーにも力を入れると同時に、かんざんじ温泉エリアを運航し、1日何回でも乗車できる無料巡回バス「フラワー号」や乗り捨て可能なレンタサイクル「浜名湖サイクリング『ゆ〜りん』」などの移動設備の整備にも努めている。また、「花火大会」や「遠州灘とらふぐ祭り」などのイベントも開催され、四季折々の風情を楽しめる観光スポットとしてより魅力が増す取り組みが行われている。

【浜名湖かんざんじ温泉観光協会】

- 沿革：1931年（昭和6年）、地元有志にて開設された「館山寺景勝会」を1953年（昭和28年）に発展改組し、「かんざんじ温泉観光協会」として発足。現在は「浜名湖かんざんじ温泉」としてPRしている。
- 構成：正会員75社、準会員6社、賛助会員20社、特別会員3社
旅館組合、料飲・みやげ組合、喫茶・バー組合、宴会パートナー組合、商栄組合、マッサージ組合のどこかに加入し協会会員となる。

（参考：浜名湖かんざんじ温泉HP）

しかし一方で、「何とかしなければ」という思いを持った“若手”もいた。

「若手といっても、当時20代中ごろだった私にとっては大先輩にあたる50～60代の方々。しかし熱い思いを持っておられて、帰省するたびに飲み連れて行ってもらったり、一緒に旅行に行ったりという付き合いをする中で、亡き父がホテルに懸けていた思いやかなんじ温泉が多くの旅客で賑わっていた当時の話をされるのです。それが本当に熱くてね（笑）。冷静に現状を見ると大変だということはわかりきっていたのですが、チャレンジしてみよう、そしてどうしてもダメなら、母でなく、私その後始末をしよう。その思いで、25歳の時に戻って来たのです」。

15人の間で『浜名湖えんため』を設立

ホテルの後継者として戻って来た稲葉さんは、家業とともに地域の活性化に取り組み、その根本にある個の力では決してできないかんざんじ温泉や浜名湖全体の将来的展望への挑戦を、稲葉さん

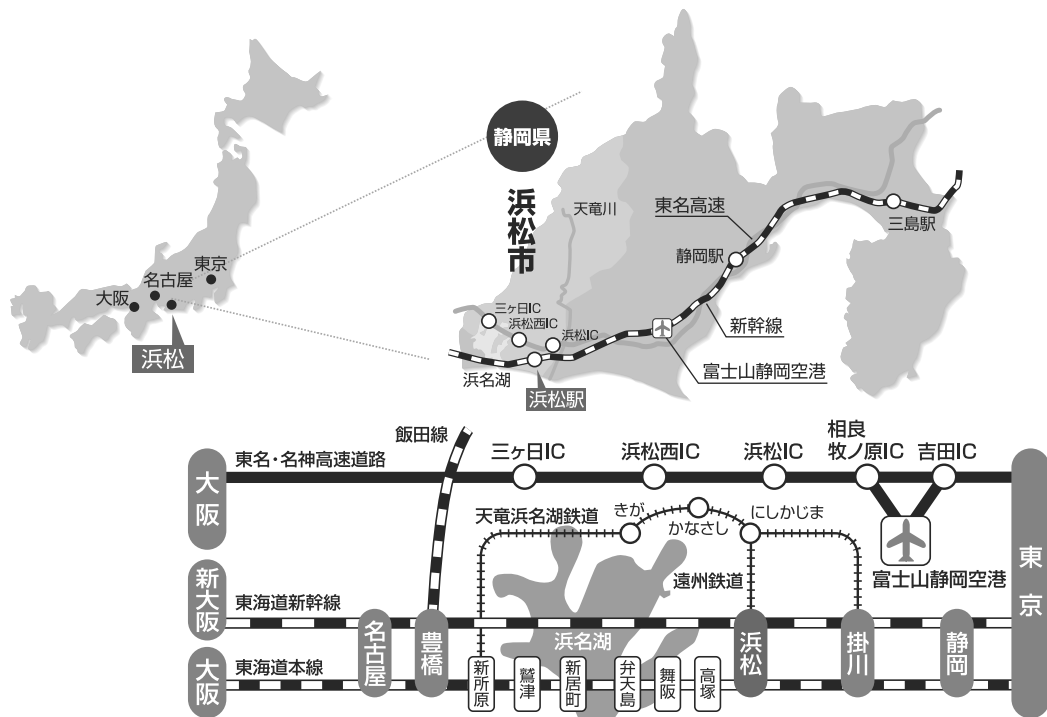
に熱い思いを注ぎこんだ仲間たちとともに2000年からスタートさせた。

「きっかけは、2004年の『浜名湖花博』、その翌年の2005年には『愛・地球博（愛知万博）』の開催が決まっており、2年間続けての大きなイベントがあることへの対策でした。ちょうどその頃、ようやく景気が上向きになり、自動車関係の景気が特に良く、“元気な中部”ということが言われ



「浜名湖えんため」代表・稲葉大輔氏

浜名湖かんざんじ温泉・ホテル鞠水亭専務。浜名湖フラワーツーリズムや天然とらふくブランド化、浜名湖ロケ応援団など、「浜名湖を全国メジャーに！！」を目指して、浜松・浜名湖の地域振興・文化交流事業に取り組む。えんためのキーワードは『よかった。ありがとう。またね。』



(浜松フィルムコミッション 提供)

始めていたのです。そんな中で、2大イベントの期間は間違いなくお客さんが増えるだろう。しかし問題はその後だと。大きなイベントの後というのは必ず反動があるので、業界的にはその反動に対して何か策を打とうじゃないかと。当時の中部運輸局の地域振興部長からも声をかけてもらい、有識者の方にも参加していただいて、まず、まちづくり交付金を活用した、いわゆるハード整備に対する動きを始めたのです。

稲葉さんたちは、「会」を立ち上げるということが目的ではなかった。「まちづくり」を見据え

【資料2】

『浜名湖えんため』組織概要

団体名称：浜名湖えんため（正式名称：環浜名湖地域の観光振興を考える会）

設立：2003年

代表者：稲葉大輔（ホテル鞠水亭）

活動内容：「えんため」とは、「歓待・おもてなし」を意味する「エンターティメント」からの造語。浜名湖が全国、そして世界各地からの観光客を歓迎し、おもてなししたいとの思いを込め名付けられた。その名前からもわかる通り、目指すは環浜名湖地域の観光振興。「浜名湖をメジャーへ」の掛け声のもと、かんざんじ温泉観光協会を中心に、浜松市、浜名湖周辺市町村、静岡県、中部運輸局ほか、官・民・業が一体となって、さまざまな活動を行っている。その活動はこれまでも、遠州灘天然とらふぐのブランド化や花のまち浜松のフラワーツーリズム事業、映画やドラマのロケ誘致や撮影事業など多岐にわたる。現在は任意団体として事業制の形をとって運営している。

所在地：浜名湖えんため事務局
静岡県浜松市西区館山寺町1832-1
053-487-0194

●えんため（ENTER-ME）のそれぞれのワードには、以下の会の目的も込められている。

- E = eco-friendly
- N = native
- T = tourist attractions
- E = emotional
- R = resort
- M = major
- E = enrichment

た動きが進む中で、門前通りの整備に関してはある程度の見通しが立ち、その工事に着手したころ、「ハードだけで人がくる時代ではない、ソフト面もやっぺいこう！」という声が上がったのである。そのためには、何らかの組織をつくろうということになり、浜名湖かんざんじ温泉観光協会を中心に商工会や個人的につながりのあった有志15人で、「環浜名湖地域の観光振興を考える会」、通称「浜名湖えんため」を結成。その代表に抜擢されたのが稲葉さんだった。（資料2）

『『将来のことを考えるんだから、一番若いお前がやれ！』の一言で決まったんです（笑）。当時は、一番若造なのに、『どうして自分が？』という思いでしたが、会をまとめていく力はないけれど、一番の問題点である後継者をどうするかということに対して、彼らと近い私が話をしに出向いたり、一緒になって活動できることを探ったりと、若者をまとめていくことが求められたということでしょうね（笑）。』

2. 「浜名湖えんため」が目指すところ

『浜名湖えんため』

スタートダッシュ成功の要因

「浜名湖えんため」は設立したその年にはもう、1つの成功事例を上げている。その成功事例は後ほど紹介するが、稲葉さんの言う「好結果につながった」ポイントをまとめると、次のようになる。

ポイント①…好機を逃さない

「浜名湖花博」と「愛・地球博」が開催される2004年、2005年の2年間は集客が期待でき、仕事も増え、お金も入る。そのタイミングを逃さず、普段できないことをその時にやり、その後の活動のための余力を備えるとともに、さまざまな企画を打ち、楽しいことが満載の2年間をアピールし、一旦離れている後継者を呼び戻しやすい雰囲気醸成。

ポイント②…注目度を醸成しながら地道に口説く

後継者と年が近い稲葉さんを中心に、1軒1軒、旅館や飲食店など観光協会の協会のところへ出向き、親には「後継者がいれば将来展望は描ける」と、後継者には「一緒にやろう。戻ってこい」と地道に口説いて回った。最初はけんもほろろのところや、連絡先がわからず後継者本人と話せるまでに時間がかかることも多かったが、その間に、同時にポイント①で地域の注目度を上げる事業に取り組み、話をしやすい雰囲気をつくっていった。

ポイント③…仲間意識の醸成

先輩の「共に何かに向かうのに一番大事なものは、本音で語り合える仲間意識だ」というアドバイスをもとに、まず自分たちが楽しめる会にしようと、飲み会や遊びの会も頻繁に開催。「仕事のために」「地域のために」という大義名分だけでなく、まず「あいつの言うことなら」「あいつらと一緒になら」という仲間づくり、土台づくりができたことで、事業をスピーディに進めることができた。

つまり、まず、地域の活性化に必要不可欠な若い世代を地域に呼び戻すことに徹底して力を注ぎ込んだのである。

その一方で、「浜名湖えんため」は、浜名湖かんざんじ温泉観光協会が中心の組織であるものの、設立当初から「かんざんじ（館山寺）」という小さな枠にはこだわっていない。浜名湖を取り囲む周辺地域を「環浜名湖地域」と位置付け、環浜名湖地域がひとつになって観光振興に取り組み、浜名湖の知名度を上げ、浜名湖周辺が観光地として発展することを目指し、そのネットワークづくりを行う組織として立ち上げている。この最大の狙いは「動きやすさ」である。浜名湖というキーワードで取り組むことで、より多くの地域資源を有効活用できる道を探ることができ、情報発信や新しい観光交流資源の開発、地域ブランドづくりも行いやすくなる。

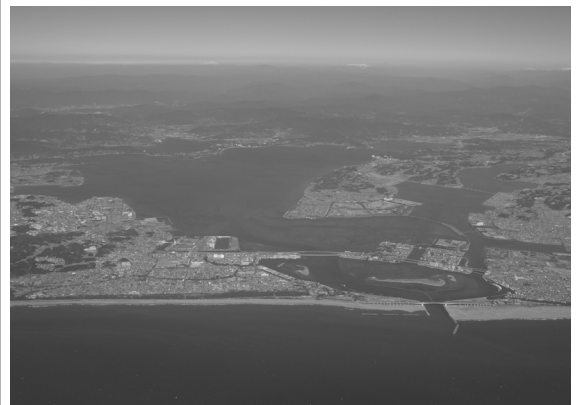
【コラム “環浜名湖” 地域とは】

浜名湖は、静岡県南西部、浜松市と湖西市にまたがって位置し、その南端は幅200mの「今切口」により遠州灘につながっており、海水と淡水が混じり合った「汽水湖」と呼ばれる湖である。周囲128km、水域面積70.4km²、平均水深4.8m（最深16.1m）で、湖としての大きさは日本で10番目。この浜名湖に面し、周囲をぐるっと取り囲む「環浜名湖地域」は、大きく4つのエリアになる。南側に宿場町として栄えた歴史を持つ舞阪・新居地域、東側には、モリでカニや小ダコをとる「たきや漁」で有名な旧雄踏町地域、北側には浜名湖かんざんじ温泉や三ヶ日・細江地域、そして、愛知県と隣接する湖西地域である。

これらを擁する環浜名湖周辺地域は変化に富み、かんざんじ、弁天島、三ヶ日などの温泉地をはじめ、海水浴場や潮干狩り場、マリンスポーツ基地があり、動物園、フラワーパーク、遊園地などのレジャー施設も充実。さらには、寺社仏閣や関所などの歴史的名所・旧跡も多い。

また、浜名湖のうなぎや天然とらふぐ、天然はも、三ヶ日のみかん、花きなど、農水産物にも恵まれている。

ほかにも、輸送機器や楽器を中心とした製造業も盛んなものづくりの地域として、そして、大風による凧揚げ合戦に代表される「浜松まつり」や姫街道の道中行列を再現した「姫様道中」、各地の花火イベントなど、浜名湖周辺地域における観光資源のポテンシャルは高い。



地域の担い手を呼び戻すことに注力し、動きやすい活動領域を設定したことで、浜名湖えんためは、組織を立ち上げて早々、次に紹介する大きな成功体験を得たのである。

成功体験を得た

「遠州灘天然とらふぐ」のブランド化

浜名湖えんためが最初に取り組んだ事業は、「天然とらふぐのブランド化」であった。浜松や浜名湖と言えば、多くの人はずぐに「うなぎ」を思い浮かべると思うが、実は、天然のとらふぐの内、約6割が浜名湖沖の遠州灘で水揚げされるという日本有数の天然とらふぐの産地なのである。しかし浜名湖えんためが設立される以前は、浜松市においてもその事実を知っている人はほとんどおらず、隠れた地域資源であった。

「この天然とらふぐが浮かび上がって来たのは、2003年に地域資源を探すワークショップを開催し、とにかく地域資源を100個探そうということで取り組んだことからです。20や30個なら誰もがすぐに思いつくのですが、100というのはなかなか大変な作業。その中で、なんと70番目だったのが天然とらふぐです。50個までにしていたら、いまだ日の目を見ていない可能性大でしたね（笑）。私自身、遠州灘で天然のとらふぐが獲れているなんて思ってもいませんでしたし、おそらく当時その事実を知っていたのは漁師さんだけだったでしょう。どうも浜名湖沖の遠州灘は海流の変化により、17年ほど前から天然とらふぐの漁獲が大幅に増え、日本屈指の漁場になったということです。」

しかし、この、せっかくの地域産の天然とらふぐは、わずかに数匹が地元でのふぐ料理屋や料亭に卸されていた程度で、浜名湖かんざんじ温泉の旅館に入ってくることは、2003年以前は全くなかった。そのほとんどは、地元舞阪漁港に水揚げされた後、生きたままトラックに積み、ふぐのメッカとして知られる山口県下関市へと運ばれ、下関



浜名湖かんざんじ温泉では、魚の解禁に合わせて、10月から2月末まで「遠州灘天然とらふぐ祭り」を開催。

(浜名湖えんため 提供)



遠州灘ふぐ調理用加工工場の様子。地元での加工のため鮮度の高さは保証されるほか、流通経費のカットにより、地元での提供価格が3割程度安くなっており、「新鮮」「安心」「安い」という3つの魅力を持った天然とらふぐが、現在、浜松では提供されている。

(浜名湖えんため 提供)

ブランドの中でも最高の天然とらふぐとして全国に流通していたのである。

「天然ものは内臓に猛毒があり、専門の資格を持った調理師でないとさばくことはできません。処理できる店がほとんどない当時の浜松では、市

場となりえなかったわけです。『これだ！』と思いました。浜名湖えんための目指すところとピッタリだと。うなぎに続く地元特産品として商品化し育てよう、かんざんじ温泉の冬の名物にしようということで、すぐに下関に視察に出向きいろいろ教えてもらったのです。そして加工処理工場があれば、各旅館が免許を持たずとも良いことがわかり、浜名湖えんためとは別組織の「遠州灘ふぐ調理用加工協同組合」をつくり、そこが加工処理工場を運営する形にし、浜名湖えんためが宣伝PRを担うことにしたのです。」

その動きは、非常にスピーディだった。当初、1年間を準備期間と考えていたが、すでに浜名湖えんためという組織の一人ひとりがあうんの呼吸で動ける体制になっていたことや地元大手企業の協力もあり、2003年中には体制がほぼ整い、2004年の浜松花博の時にPRが行えるまでになっていた。そして同年、この遠州灘天然とらふぐブランド化事業は、経産省のジャパン・ブランドの事業に採択され、その助成金により、一気に整備が進められたのである。現在では、「遠州灘ふぐ調理用加工協同組合」に加盟しているかんざんじ温泉地区のホテル・旅館をはじめとする浜松市内の24施設では、天然とらふぐがこの地域の名物の一つとして毎冬（10月～2月）提供され、集客の大きな要因になっている。（資料3）

「浜名湖えんための活動をスタートさせる際、中部運輸局や、地元の有識者の方から、『とにかく成功事例をまずつくれ』と言われていたのですが、それを実感しましたね。おかげさまで、一つの事業を成功させる過程を経験したことが、浜名湖えんための活動を盛り上げる非常に大きなはずみになりました。」

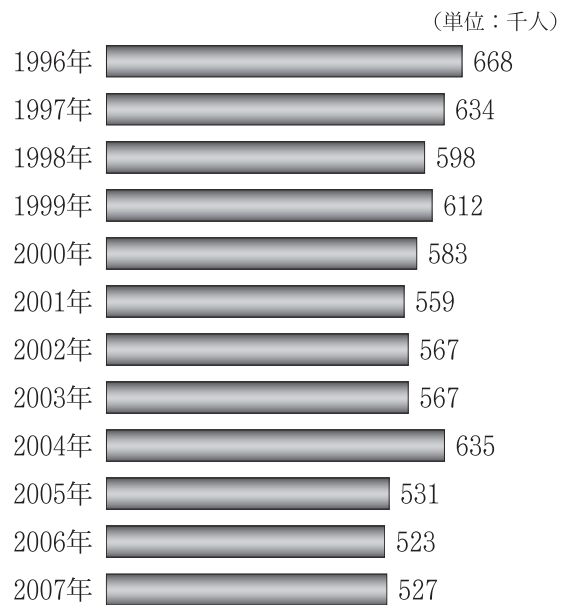
浜名湖えんためでは、天然とらふぐの他、夏の名物として天然ハモ（6月9日「遠州灘天然鱧祭り」開催）の地産地消・ブランド戦略事業にも着手し、成果を上げ始めている。さらに、地域ブラ

ンドのキャラクターPR展開や浜名湖花博開催中には最重要事業としてグリーンツーリズム&フラワーツーリズム事業を推進。これらは、浜名湖周辺で眠ったままになっている多くの魅力的な地域資源を発掘し、それらを生かした新たな観光事業への挑戦でもある。

「観光資源というと、単に観光施設や名所・旧跡と思いがちですが、農林水産業の一次産品や、産業観光といわれる製造業の過程、さらには市民活動などによるサービスやコンテンツづくり、体験や協働事業も資源であり、またそれに携わる市民も大きな資源のひとつなのです。それらを有機的に組み合わせ、宝の持ち腐れとなっているような資源の商品化や、情報発信を担う仕組みづくりをやっていきたいのです。」

【資料3】

【浜名湖かんざんじ温泉の宿泊客数】



天然とらふぐ事業によるホテル・旅館の業績については、「その後の景気悪化の中、増加に転じてはいないものの、減少を食い止めており、効果があった」と浜名湖えんためでは捉えている。また「100%天然とらふぐ」というブランド価値確立のため冬季限定（季節もの）にこだわっており、1年を通しての集客は見込めないが、「おそらく浜名湖花博時にPRを開始できたことが非常に大きく、ふぐ目当ての宿泊客の増加は、当初の想定よりはるかに早く表れている」という。

3. 浜松発の映画製作の経緯

大コケした「ロケ応援団」の募集

そんな思いの中で、次に、稲葉さんたちが取り組んだのが「ロケ応援団」であった。

「ありがたいことではあるのですが、地域で天然とらふぐブランドの成功をかなり取り上げてもらったことで、浜名湖えんため=ふぐの団体といったイメージがついてしまって（笑）。浜名湖えんための活動はこれだけではないということをアピールするためには、全く違うことをやる必要がある。それとともに、後継者を呼び戻す魅力ある事業とは何かを改めて考えた時に、以前から浜名湖周辺はロケ地としてよく使われていたこともあり、メディアの効果を観光にもっと生かすという意味で、ロケを応援する事業に取り組もうと思ったわけです。これなら多くの市民が参加してくれるだろうとも思いました。」

しかし、そんな稲葉さんたちの思惑は見事に外れる。募集をかけてもほとんど集まらないのだ。1年かけて募集した結果、登録メンバーは何と20人程度しかいなかった。単純にロケを手伝うというレベルであれば、この人数でもいいが、稲葉さんたちがやろうとしているのはまちおこしである。「観光振興を考える会として浜名湖えんためを立ち上げ、ふぐで成功体験を得たつもりでしたが、それは観光事業者が『よしやろう！』と意気込んでできたこと。そうではない一般市民を巻き込んでやるには、その時点では、我々観光事業者と一般市民との間に温度差がものすごくある」ことを浜名湖えんためのメンバーは痛感したのである。

今でこそ、各地にFC（フィルムコミッション）が誕生し、地域おこしの一つ的手段として取り組まれているが、2003年、2004年当時はまだ一般的ではなく、ロケ応援団なるものが何なのか市民には伝わらなかったのである。

経済産業省の支援事業として生まれた『天まであがれ!!』

そんな中、2005年に、ロケ誘致による地域の活性化を目的にした経済産業省の「平成17年度地域におけるアーカイブ整備支援事業」へ応募しないかという話が持ち込まれる。

「天然とらふぐ事業の時にお世話になったコンサルタントさんからの声かけでした。わかりやすく言うと、映画をつくって地域を盛り上げましょうという事業。採択されるのは3件ということでしたから、完全に無理だろうと思いましたが、映画をつくるとなれば、話題が大きくなるし、少なくともロケ応援団の数は増やせる。そう直観的に思って動いたのです。」

今度は、いい意味で稲葉さんの予想を裏切り、浜名湖えんためによる映画製作が採択されたのである。明確な目的と「浜名湖をメジャーへ」という掛け声のもと、官・民・業が一体となって観光をテーマにまちづくりに取り組む姿勢が評価され、その中心団体として活躍する浜名湖えんためが生み出す映画がどんなものなのかに期待が集まったのである。

そして、実際の映画製作については、経済産業省から紹介された製作会社の1つ、吉本興業へ依頼することになった。

「全てお任せのつもりだったのです。我々としてはそのはず、だったのですが、吉本興業さんの発想は違っていた（笑）。地元発の映画として、やはりメインプロデューサーは稲葉さんがやるべきだと言われ、企画、脚本、キャスティング、ロケの手配に至るまで、ほぼ全て関わることになってしまったのです（笑）。しかも支援事業として下りてきた予算は4000万円。それは通常、ドラマ1本、CM1本つくる予算。その予算で、しかも国の採択事業なので、翌年（2006年）の3月までにつくらないといけない。いざ、製作準備を始め

てみると、難題続出です。しかし、どうせやるなら、市民に一番関心を持ってもらえるものでやりたい。低予算の中、吉本さんからは『ふぐのドキュメンタリーはどうですか?』と言われましたが、即座に断りました。我々が浜松の中で映画事業をやろうとした最大の理由は、浜松市民とネットワークをつくりたいからであり、ふぐではそれは無理



地元オーディションで、横山一洋監督がその個性の豊かさで選んだ、主人公・天馬少年のライバル役の子どもたちと担任の先生。「人」という資源も映画製作で発掘。

(浜名湖えんため 提供)



映画『天までとどけ!!』の主演は、鈴木天馬少年（鈴木達也）と中山功元凧作り名人（穴戸錠）。横山監督（右）は、この映画が映画監督デビュー作。

(浜名湖えんため 提供)



低予算の中、浜名湖口ケ応援団や凧の会をはじめ、多くの市民がボランティアやエキストラとして活躍。

(浜名湖えんため 提供)

ですから。

浜松市民にとって一番関心があるのは、浜松まつりの凧であることは間違いない。だからとにかく凧を題材にしたいということを伝え、さらに、その中に浜松市民の熱い思いが織り込まれることが重要だろうと、脚本家ととことん話し合いました。」

映画製作の先にある 地域づくりの物語を考えて

稲葉さんはさらに、注目を浴びて、マスコミができるだけ多く映画情報を流してくれる中身にするために、人が動く心理を考え、老人と子供をメインにした内容にすることを監督と話し合ったという。そうして出来上がった映画が、『天まであがれ!!』である。(資料4)

実は、稲葉さんには、この映画を製作することによる、その先の物語が頭にあった。

【資料4】

【映画『天まであがれ!!』あらすじ】

浜松っ子の魂・大凧が結ぶ、 人と人との心の絆を描いたヒューマンドラマ

幼くして父親を事故で亡くし、東京から父のふるさと浜松へ転校してきた10歳の少年・天馬。昔、父親がつくった凧と一緒にあげた天馬の大切な思い出を軸に、同級生たちからの孤立、心を閉ざした伝説の凧作り名人である老人との出会い、そして彼らを取り巻く人々のさまざまな思いも絡み合い、物語は25帖もの大凧を完成させる過程を通じて少年の成長と老人の再生を描きながら進んでいく。クライマックスは25帖の大凧をあげるシーン。天馬の亡き父への想い、老人の亡き息子への想い、それぞれの願いが込められた大凧は、果たして大空に舞いあがるのか？ 浜松の魅力あふれる風景をバックに心温まるドラマが展開する。

『天まであがれ!!』(2006年公開)

出演：鈴木達也、佐津川愛美、穴戸錠、伊藤かずえ、
武田修宏ほか

監督：横山一洋

プロデューサー：稲葉大輔、吉田晴彦、小川勝広

制作：イエス・ビジョンズ

製作：『天まであがれ!!』製作事業コンソーシアム

配給：『天まであがれ!!』上映実行委員会

©2006『天まであがれ!!』パートナーズ

「観光事業において、行政は動いてくれるのですが、学校が動いてくれないことが多いのです。子どもたちや学校組織とのネットワークがほとんどなく、これを機会にぜひとも学校や子どもたちを巻き込んだ観光事業をしていきたい。ですから、作品ありきではなく、その先にどういうことをやりたいかということを中心に考えた時、子どもをメインにするというコンセプトが生まれたのです。」

キャスティングに関しても、主役級および脇を固めるキャスト陣は今後の活躍が期待される若手や知名度の高い俳優を置き、一方で主人公の小学

生・天馬少年のライバルとして登場するクラスメイト役などは、地元オーディションで選んだ。映画のエンドロールには、彼らキャストの他、多くの市民エキストラや浜名湖ロケ応援団の人々の名前が流れる。この『天まであがれ!!』の上映は、浜松市以外では東京の下北沢だけで、「配給、興業については正直ほとんど考えておらず、その点では失敗だった」と稲葉さんは語る。しかし、「浜松の人々を巻き込みながら映画づくりは進んだので、市民とネットワークをつくるということにおいては、非常に大きなきっかけになった」という。

【コラム 中田島砂丘と浜松まつり・凧揚げ合戦】

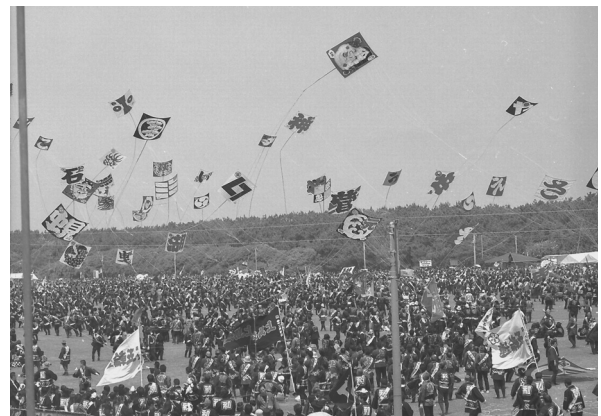
日本3大砂丘のひとつで繰り広げられる浜松っ子をひとつにする凧揚げ合戦

遠州灘を臨む中田島砂丘を舞台に勇壮な凧揚げ合戦で知られる浜松まつり。その起源は城主の長男誕生を祝ってあげられた祝い凧に由来すると言われ、江戸中期には町民の間で風習として広がったと考えられている。「遠州のからっ風」と呼ばれる強い風が吹く気候条件も凧揚げには最適で、子供の誕生を祝う初凧の伝統が今日まで浜松まつりとして根付いている所以である。子供の成長と幸せを願い、町の若衆と親子と一緒に家紋と子供の名前が入られた凧を大空に舞い揚げる。続いてラッパの音と共に凧揚げ合戦の始まり。太さ5mmの麻糸を互いに絡ませ、摩擦によって相手方の糸を切る「ケンカ凧」は、浜松っ子の技と心意気が真正面から激しくぶつかり合う。170町の凧が5月の空に一斉に舞い上がる姿は圧巻。

浜松まつりはまた、寺社仏閣の祭礼とは関係ない「都市まつり」として市民が主役の参加型の祭りであることも大きな特徴で、浜松っ子の郷土の誇りとして、浜松まつりはまさに市民によって盛り上げられ、守られ続けているお祭りである。毎年5月3～5日に開催され、「凧揚げ合戦」の他、「御殿屋台引き回し」「練り」、さらに郷土芸能や吹奏楽パレードなどのイベントも行われ、期間中は浜松中が熱気と興奮に包まれる。



日本3大砂丘のひとつで凧揚げ合戦の舞台・中田島砂丘。ロケ地として数多く使用されている。(浜名湖えんため 提供)



170町の凧が5月の大空に舞い上がる浜松まつり・凧揚げ合戦の様子。(浜名湖えんため 提供)

動き出すと変わってくる。 「やらまいか」の精神で次へ

そして、その市民とのネットワークを背景に、「今度は地域の活性化や観光振興にしっかりとつながる映画をつくろう」ということで臨んだのが、現在公開中の『青い青い空』である。

「浜名湖えんため」による、地元ロケ映画の第2弾プロジェクトとなるこの『青い青い空』は、浜名湖えんための活動や市民を巻き込んだ本格的な映画製作を実現した浜松の様子を知り、そういった地域の振興につながる映画をつくりたいという熱い思いを持った映画監督・太田隆文さんが、「この地でぜひ書道の映画をつくりたい」と持ち込んできたものだった。

しかし、2006年に初めて企画が持ち込まれた時は、『天まであがれ!!』の製作が終わったばかり。稲葉さんたちにすぐに次の映画製作の取りかかる気力は残っておらず、一度は断ったのである。

「ただ、前回やりきれなかった部分、つまり多くの人に観てもらおうということと、前回よりも多くの市民の協力を得ることができれば、たとえどんなに大変でもやる意味はあると考えているということは、太田監督にお話したのです。そして監督も、ただ撮りたいというのではなく、市民を動かせるぐらいのエネルギーを注いでくれるのなら、そういう動きになったら、もう一度、お話を聞かせて下さいと申し上げたのです。」

それから2年。2008年になると、太田監督と一部の有志が映画製作実現に向けて活動しているという情報が市民に行き渡り始めたのである。「太田監督は本気なのだ」と稲葉さんは受け止め、前回の映画製作に携わったメンバーを集めミーティングを開き、実行委員会を発足し、産・官・学・民協働プロジェクトとしてスタートさせたのである。

「当初考えていた予算は、『天まであがれ!!』よ

【映画『青い青い空』あらすじ】

書道愛する町・浜松を舞台に、 大切なことは何かを問う青春物語

浜松で高校生活を送る17歳の真子は、大学受験のことで対立している母親とは1年も口を聞いていない。そんな中、親友にせがまれ、書道部に嫌々入部。最初は書道が大嫌いだった真子だが、「書道は上手い下手とは違う！何よりも自分の気持ちを表現することが大切！個性的であることが大事だ！」との顧問の言葉や、巨大な紙に何人も同時に大きな文字を音楽に合わせて書く「書」のデモンストレーションとの出会いに、徐々に書道への関心を高めていく。誰とも口をきかない、ダイエット中毒、オタク、書道への蔑みなど、それぞれに問題を抱える仲間を巻きこみながら、デモンストレーション発表への大舞台に向けて特訓が始まる。その過程で、子供たちだけでなく親たちも、忘れていた大切なことに気づいていく…。今、子供たちに伝えるべきことは何か？書道で綴る涙と感動のストーリー。

『青い青い空』（2010年公開、現在も公開中）

出演：相葉香凛、草刈麻有、橋本わかな、田辺愛美、平沢いずみ、富田桂輔、波岡一喜、藤田朋子、袴田吉彦（浜松やらまいか大使）、鈴木砂羽（浜松やらまいか大使）、塩見三省、長門裕之、松坂慶子ほか

原作脚本&監督：太田隆文

プロデューサー：稲葉大輔、川原正一、太田隆文

制作ボランティア：浜名湖えんため・浜名湖ロケ応援団

【浜松・浜名湖地域振興映画製作プロジェクト】

主催：書道ガールズ実行委員会

財団法人浜松市文化振興財団 浜松市 浜松商工会議所 静岡文化芸術大学 財団法人浜松観光コンベンションビューロー 公益社団法人浜松青年会議所 静岡県書道連盟 浜名湖えんため・やらまいか実行委員会

製作：2010 『青い青い空』製作委員会、㈱キットクルー、浜名湖えんため

制作・配給：㈱キットクルー

りもさらに少ない3500万円。2009年にリーマンショックがあった中で、地域の皆さんの寄付によって集まったお金です。しかしやはり結果的にはそれ以上のお金がかかっており、現在は1000万円ほどの赤字を製作委員会が抱えている状況です。しかし、映画の出来としては非常に質の高いものになっており、今回は、最初から興業収益も見据えて製作に取り掛かっています。その手段の1つが、さまざまな海外の映画祭への出品です。海外の映画祭出品はそれほどお金がかからず、その中の1つにでも取り上げられれば、大きな話題を伴って日本

に帰ってくる。宣伝力とお金はありませんから、そういった知恵を出して、逆輸入バージョンでヒットさせ、そこから配給先が増え、取材で取り上げられることで付加価値がつく。そういったことを狙い取り組んでいます。

これはね、『地域発』で映画をつくる一つのビジネスモデルにしたいという挑戦でもあるのです。市民の発案が形になって行って映画づくりに直結しているという例は本当に少ないでしょう。今回まだ赤字ではありますが、うまくペイできてビジネスモデルとしてきちっと成り立つようになると、次の段階へ進めます。これが一つの成功事例になれば、それは映画製作ということで終わらずに、その後の地域のコミュニティづくりや観光振興、さらには経済や商業の振興の枠組の土台になっていくということに必ずつながっていくと思います。2本目の映画の話が最初にあった時は、正直、前の苦しかった思い出が強く、映画製作に関しては2度と関わらないと思っていたのですが（笑）、不思議ですが、動き出すと変わってくるんですね。

知らず知らずのうちに目標を高く掲げ、いろんな人を巻き込みながら、その達成に向けて仲間が集まってまい進している（笑）。これが、実は、浜松特有の『やらまいか精神』なのでしょうね。」

「やらまいか」とは、「さぁ！やろうよ！」の遠州弁である。稲葉さんによると「オートバイや楽器などさまざまな産業を生み出してきたものづくりのまちである浜松人の独特な気質を意味している」という。

「私は、地域づくり、まちづくりというのは、どれだけその地域の特徴を生かせるかにかかっていると思っています。やらまいか精神を持つ浜松人は、『やろう！』と声をかけると、その思いを放っておかず『やってやろう！』と熱く取り組んでくれる。けれど、実は、冷めるのも早い（笑）。本当にそこはとてもわかりやすい。浜松はビジネスにおいても新規参入がともしやすいとよく言われます。とにかく誰でも受け入れる。その代わ

【コラム「書道の町」・浜松】

なぜ、浜松に「書道」をテーマにした映画製作が持ち込まれたのか？

浜松市でオールロケされた映画「青い青い空」。書道に励む女子高生を描いたこの作品の舞台として、太田隆文監督が浜松市を選んだのには「浜松は書道が盛んな町」という理由がある。これは本当だろうか？

「浜名湖えんため」代表・稲葉氏は「専門家に聞いても、理由はよくわからない」という。しかし、全国でも書道科を持つ高校は10数校といわれる中、浜松市内には浜松学芸高校、興誠高校の2校があり、書道部は19校、書道専任講師もたくさんいるというのは周知の事実である。さらに書道教室は正式に登録されているだけでも149教室。これは東京よりはるかに多いそうだ。

地元の新聞記者がその真意を確かめるべく調査したところ、「浜松には熱心で若い書道家が多く、東京や大阪で修行してもそこに住み着かずに浜松に帰ってくる」との証言を地元の書家から得たという。その背景には浜松人に伝わる「やらまいか精神」も少なからず要因なのでは？と推理する。浜松出身の書家たちは、そこそこ有名になると、流派を背負わずに独立するというのだ。そして、地域が書家を大切にするという風土も根付いているようだ。それは浜松まつりを見れば納得できるという。浜松まつりで揚げられる凧に描かれた文字は筆文字である。また、長男の誕生を祝って凧を揚げたことが起源といわれる浜松まつりでは、各町の詰め所にその年の初子の名前が掲げられるのが習わしだが、その名を書くのは地元の書家なのだそうだ。こうした市民の愛する行事に、自然と書の文化が受け継がれ、根付いていることから、「浜松は書道の町」なのである。（参考：2010年10月3日 中日新聞静岡版）



映画『青い青い空』は太田監督(写真左)にとって、青春ファンタジー映画「ストロベリーフィールズ」に続く劇場作品の第2作目。「ロケをするにはまずロケ地を知り好きになってから」と自分の足で見つけた浜松の魅力ある場所を物語の舞台として数々登場させている。(浜名湖えんため 提供)

りダメな時は、切るのも早い。つまり、浜松で何かをやりようと思うと、次々と人々の心を打ち続け、真摯に取り組んでいくことが重要なのです。」

きちんと儲かる観光ビジネスモデルをつくりあげていく

現在、「浜名湖えんため」は、会員組織による活動を辞めている。最初15名でスタートした浜名湖えんための会員数は、最初の映画製作完成時には、その波及効果により100名に膨れ上がった。当時は1人1万円の年会費を徴収しており、100万円の活動資金があったのである。しかし稲葉さんは「目的と手段が違ってきていることに疑問を覚え葛藤した」のだ。浜名湖えんためとは、環浜名湖の観光業全体の活性化を図る組織であったはずが、各々やりたいことだけをやりたいと入会している人たちが大勢になったことで、目的を明確にして活動できなくなっていたのである。

「当時、NPO化という動きが全盛の時で、行政からもNPOになってほしいと言われ、申請書もつくり提出するだけになっていました。しかし、腹の底ではどうしてもその方向性に疑問を感じる自分がいて、NPO化はしないと決断したのです。それと同時に、会員組織ということもやめました。2007年のことです。任意団体として事務局機能が



『青い青い空』では、大小さまざまな書道作品が紹介されるが、その一部は取材の中で出会った実話をもとに構成されている。(浜名湖えんため 提供)



低予算作品ながら、松坂慶子さんや長門裕之さんといった大俳優から、活躍著しい浪岡一喜さん、鈴木砂羽さんなど豪華キャストが出演。(浜名湖えんため 提供)

けを残し、プロジェクトごとにそれにふさわしい人が集まって取り組む事業制に変えたのです。第2弾の映画プロジェクトはその事業制の1つとして生まれています。」

稲葉さんの中にあっただのは、「我々はボランティアではない」ということだった。市民を巻き込みながら、きちんと儲かる観光ビジネスモデルをつくり上げていく。結果的にそれが地域のためになる。映画というコンテンツもそのための手段の一つなのである。

そして、稲葉さんたちの活動のそもそものきっかけであった浜名湖かんざんじ温泉の後継者問題は、現在のところ、危機的状況からは脱している。ホテル・旅館に関しては5人の後継者が戻って来た。さらに、飲食店なども含めると、その数は10人に上るといふ。

「その中には、活動をスタートした当時はゼロだった、私より年下の後継者もいます。やはり若手が自分たちで地域を盛り上げていこうと取り組むことが、まちづくりの本来の姿だと思います。これからますます大変な時期に入ると思いますが、その本来の姿に少し立ち戻れたことを生かしていきけるよう、これからも取り組みたいと思っています。」

結びにかえて

映画を育て、地域へ帰す

『書道ガールズ・青い青い空』は、2010年（平成22年）10月から浜松市において先行公開され、結果3カ月のロングラン上映となり2万人を超え

る興業成績を上げた。現在（2011年4月20日時点）は関東で上映中である。さらに、先に紹介したように、浜名湖えんためを中心とする書道ガールズ実行委員会が映画製作当初から狙っていた海外上映は、まずその第1弾として4月にアメリカ・ロサンゼルスで開催された「JAPAN FIIM FESTIVAL」で実現し、多くの拍手喝采が得られたという。「浜松・浜名湖地域振興映画製作プロジェクト」は、映画をつくって終わりではなく、その映画を育てること、そして育てた結果生まれる波及効果を地域へと帰すことに、今まさにチャレンジしている。

これからこの映画がどのように育ち、その波及効果がどのように地域へと帰ってくるのかが非常に楽しみである。今後の動向に注目していきたい。

<浜名湖えんため&稲葉大輔代表の活動年表>

年月日	稲葉大輔代表&浜名湖えんための動き	世間・地域等の動き
1999年	25歳、東京から帰郷 浜名湖かんざんじ温泉にある「ホテル鞠水亭」の跡取りであったが、母親からも「継がなくていい」と言われていたため、大学卒業後、東京で就職。しかし取引先金融機関からは「後継者がいれば支援する」と諭され、迷っていた時に地元の先輩たちから、亡き父の思いや、過去の話聞き、「ちょっとやってみようか、30歳までやってダメなら、後始末を自分でしよう」と決意し帰郷。	◆「浜名湖かんざんじ温泉」の深刻な後継者不足 ↓ 将来的に危機的状況
2000年	26歳、まちづくり交付金のハード整備事業に参加 稲葉氏と同世代や後輩の後継者不足が深刻化する中、まちづくり交付金事業を活用し、地域の有識者ら15人ほどのメンバー（館山寺温泉観光協会を中心に商工会や個人的なつながりのあった人など）が集まり、アドバイザーとして中部運輸局の地域振興部長を迎え、イベント（浜名湖花博、愛知万博）後の反動に備えた地域振興策を練る。その一方で、後継者を呼び戻す活動を地道に進める。	
2003年	29歳、「浜名湖えんため」発足 浜名湖を全国的にメジャーな観光地にするために、館山寺だけにこだわらず、三ヶ日、舞阪、弁天、浜松市内も含めた「環浜名湖」を活動エリアと定め、正式名称「環浜名湖地域の観光振興を考える会」、通称「浜名湖えんため」を発足。メンバー15名でスタート。先輩のアドバイスから、当初は、飲み会を頻繁に開き、飲んで遊んで仲良くなって、本音で語り合える仲間づくり、土台づくりを行った。 遠州灘産天然とらふぐのブランド化に着手、発表 「儲かるビジネスモデルを」ということで、商品になりそうな地域資源を100項目ピックアップ。その中で70番目と認知度は低かったが、一番商品力がありそうだった「天然とらふぐ」に着目。 「遠州灘ふぐ調理用加工協同組合」を設立し、旅館等への提供始める ふぐのメッカである山口県下関を視察し、アドバイスを得て、「遠州灘ふぐ調理用加工協同組合」（浜名湖えんためとは別組織）を共同出資にて設立。遠州灘で取れたふぐだけを使って、そこで加工したものを各旅館に卸すという流れを確立。館山寺温泉を中心とした旅館、ホテル、料理店での提供を始める。ブ	◆「浜名湖えんため」誕生 ◆「遠州灘天然とらふぐ祭り」スタート 期間：10月～2月

	<p>ランド名を「遠州灘（しずおか）天然とらふぐ」とし、商標登録の申請をするも、「実績がない」といわれ却下（⇒2011年中に再度申請予定）。しかし、あきらかに「とらふぐ」目当ての観光客が増え、オフシーズンでも集客できる手だてとなった。</p> <p>フィルムコミッションに着手</p> <p>環浜名湖地域はロケ地として使われる場所が多いことから、それをどう地域の活性化や観光振興につなげるかを模索。それとともに、市民に観光という意識を根付かせるためには、「儲からないが楽しくて何となく地域が盛り上がる、誰でも入りやすい、商売抜きで付き合える」というメリットがあるロケを「観光事業者と市民を結びつけられる一つの手段」と考え、浜名湖えんため傘下に「ロケ応援団」をつくる。しかし募集で集まったメンバーは30人で、観光事業者と一般市民との大きな温度差を痛感。</p>	
2004年	<p>「遠州灘（しずおか）天然とらふぐ」経産省のジャパン・ブランド事業を採択</p> <p>その助成金でより一層の整備強化を図った。</p>	<p>◆浜名湖花博</p> <p>◆「地域ブランド」注目</p>
2005年	<p>映画「天まであがれ」の製作に着手</p> <p>◆経済産業省のロケ誘致による地域の活性化を目的にした「平成17年度地域におけるアーカイブ整備支援事業」に応募。当初は稲葉氏の独断で、お付き合い申請したものだったが、採択され映画製作が決定。（予算：4000万円）</p> <p>◆経産省に紹介された吉本興業とタッグを組んで企画製作スタート。吉本興業に丸投げのつもりが「稲葉さんの企画立案であり、メンプロデューサーとやるべきだ」と言われ、本気になって映画製作について勉強。浜松市民とネットワークをつくりたいという思いから、市民が一番関心を持っているであろう「浜松凧まつり」をモチーフに。</p>	<p>◆愛知万博</p> <p>◆中国・寒山寺と館山寺が日中友好提携</p> <p>↓</p> <p>くしくも書道で有名な寒山寺と全国一書道人口が多い浜松市ということもあり、これを機に「書道で町おこし」という気運が高まる。</p> <p>（⇒後に、映画「青い青い空」製作へとつながる）</p>
2006年	<p>映画「天まであがれ」完成、公開</p> <p>◆浜松と東京・下北沢で上映</p> <p>配給、興業という意味での事業は失敗。しかし経産省の事業目的であった地域でつくり、まちを活性化するという意味では目的を達成。</p> <p>同時に観光振興の視点からみるとつくっただけでは意味がないということも実感。大きな課題として残った。それを今、次にどう活かそうかと思案中。</p> <p>会員数、ピークに達するも、あえて「NPOにしない」と決断</p> <p>映画製作の影響もあって会員数が100名に膨れ上がる。当時は1人1万円の年会費を徴収していたが、目的と手段が入れ違ってきていることに疑問を覚えた稲葉氏は葛藤。</p> <p>その一方で、NPO化の話もあり、準備も進めたが、検証を繰り返した結果、あえて「NPO」組織にはしないことに決定。会費制を撤去し、当初の意味での組織としての意味は終えたのではないかと、このタイミングでの「浜名湖えんため」の解散を考えるも、「えんため」の知名度が上がり、なくすのはもったいないとの声もあり、</p> <p>「浜名湖えんため」を事業制に転換</p> <p>水面下で映画「青い青い空」の企画スタート</p> <p>監督が浜松での撮影を稲葉氏に打診するも、前回の映画製作に懲り、二度とやりたくないとの思いから、この時点では一度断る。</p>	
2007年		

2008年	稲葉氏、映画「青い青い空」の企画制作始動 監督と一部の有志が映画製作実現に向けて活動しているという情報が市民に引き渡りはじめたことで、稲葉氏も奮起し、前回の映画製作に携わったメンバーを集めミーティングを開き、実行委員会を発足させる。	リーマンショック
2009年10月	映画「青い青い空」制作発表	
2010年 3月 10月	映画「青い青い空」完成、公開 ◆映画ロケスタート ◆浜松にて先行上映し、2万人が来場。	
2011年3月 4月8日～ 4月9日	映画「青い青い空」全国で、世界で上映 ◆東京・お台場「TOHOシネマズ」にて公開（⇒東日本大震災により打ち切り後、4月に再上映） ◆アメリカ・ロサンゼルスで開催される「ジャパンフィルムフェスティバル」で上映決定 ◆千葉・流山市「TOHOシネマズ流山おおたかの森」にて上映（～15日まで） 書道を集客コンテンツに 観光の中で書を活かしていきたいと思案中 緊急雇用対策の一環、「浜松でんぐりGIRL」結成 市の委託事業として、旅館や施設、イベントなどで書道のデモンストレーションを行うチームを結成。「ひっくり返る」ことを意味する方言の「でんぐりがある」と「GIRL」をかけたネーミングに。	

ロケーション 青い青い空

「あっここ見たことある！」映画の名シーンは私達の身近なあんな場所、こんな場所で撮影しました！

01 奥浜名湖 北区
ローランド研究所下の道で撮影。真子とみどりの会話シーンとアドリブ。10代らしさが感じられる。

02 籠山寺温泉 西区
書道館が合宿をするのが籠山寺。「特別開始」は赤子の下の駐車場。豊かけ合戦シーンは浜松市動物園の前にある広場。八代先生が羽根の裏の話をするのは難水亭。

03 本興寺 湖西市
長門裕之さん演じる和良の赤子と松坂慶子さん演じるオウムのシーンは本興寺で撮影された。ここだけが浜松市以外のロケ地。

04 舞阪 西区
真子とみどりの食卓シーンを撮影。数十人の地元エキストラが参加。多くの船が停泊している美しい、懐かしい風景が魅力の場所。

05 中田島砂丘 南区
真子とみどりが激突する浜辺。浜松本町の鳥居川合流地帯。広い海がヨーロッパの海のように美しい。

06 はまホール 中区
書道大会のシーンは浜松市教育文化会館（はまホール）でロケ。約1000人の観客を入れて撮影した。八代先生の大学時代もここははまホールでロケ、建物の出入口や道で、不良たちのシーンを撮影している。

07 松屋星輝堂 中区
八代先生と生徒たちがあつめる書道店。本物の書道展で、年々増える来場者を見守る。同店の倉庫で撮影された。

08 スパ1世 中区
みどりとトシ子に書道部入部を勧められる。教師のスパ1世の店。生めんが人気の店。

09 浜松城公園 中区
真子が書道の練習をするのもここ。徳川家康公がかりの城として有名。

10 聖隷三方原病院 北区
赤子が入院する病院。松坂慶子さん演じるオウムの入籍するの病院にここ。本物の病院はなかなか撮影許可が下りないことが多いが、こちらはさまざまな便宜を回ってくれたので、リアルな病院シーンの撮影が可能となった。

11 天竜二俣駅 天竜区
八代先生が不良グループに注意をするのがこの駅。監督は天竜の全駅をチェックし、この場所に決めた。トシ子が書道練習をするのは二俣駅にある駐車場。鉄道ファンにも人気のスポット。

12 天竜二俣駅 天竜区
天竜二俣駅

『天まであがれ!!』と『青い青い空』のパンフレットには、映画の場面とともにそれぞれのロケ地を紹介したページがある。

(浜名湖えんため 提供)